

ミャンマー国人身取引被害者自立支援のための能力向上プロジェクト

No4/ 2012年10月22日

ヤンゴンからミンガラバー

第1回運営指導調査

10月16日—20日の4日間の日程で第1回運営指導調査団にお越しいただきました。当初は調査団来麴に合わせ第1回JCCを実施する予定でしたが、直前になってプロジェクトマネジャーなどの主要人物に次々と海外出張が入り、日程を変更せざるをえない状況になり断念。、急きょシェルター訪問などを組み込んだスケジュールに変更するなど、日程がバタバタ変わる中、4日間でプロジェクト開始後約4か月の進捗状況を確認して頂くと共に今後の課題について議論しました。

団長の田中由美子専門員はプロジェクト立ち上げの準備調査の時からずっと関わって下さっており、事情もよくわかってらっしゃるため1年目の核となる活動のTOT計画づくりについての的確なアドバイスを頂くことができました。またジェンダー平等・貧困削減推進室の吉田職員には、CPや関係機関からのヒアリングだけでなく、被害者支援の現場を見て頂くことができました。今後本部との議論がより一層活発になることと思います。



写真左から横森企画調査員、吉田職員、田中専門員、SWTS副校長、甲木、Ei Pyoさん、古川とサブタスクフォースメンバー

今回主な訪問先はサブタスクフォースメンバーがいる社会福祉訓練校、ヤンゴンとマンダレーの女性のための職業訓練センター、ネーピードーのミャンマー警察と社会福祉局、女性課題連盟そしてIOM、World Vision、Save the Childrenなどの国際機関や国際NGOも訪問しました。各団体さまざま研修を行っている中、各機関のマッピングを行い活動が重複しないようにすることが重要だと再認識しました。

調査団の視察先の一つ、FXBの活動を紹介します。スイスに本部を置くNGO、Francois-Xavier Bagnoud (FXB)のヤンゴン郊外にあるワークショップ(職業訓練センター)を視察させて頂きました。建物の1階は土間になっていて、入り口付近では溶接コースと木工コースが実施されており、ランプや蠟燭立てが作られています。この両コースだけは男性が受講生です。奥には機織機が何台も置いてあり、女性たちが織物をしています。色合いや風合いがどれも素晴らしく、技術の確かさが伺えます。聞けばスイスから指導者を毎年呼び、最新の技術やカラーセオリーを学んでいるのだとか。3年間のコースの中で技術を学ぶと共に自分で色やデザインを考え、自分で糸も選んで布を織りあげていくそうです。同じ階には蠟燭づくりのコーナーもありました。こちらの技術は10日間という比較的短期間でマスターできるので、HIV感染者のセラピーとしての役割を果たしているそうです。

建物の裏から2階に上がっていくと、まだ幼い感じの少女や若い女性たちが縫い物をしていました。ミシンを使った洋服や小物類、カラフルな縫いぐるみやおもちゃなどが所狭しと机の上に並んでい

ます。こちらでもデザインに工夫があり、見ていても楽しくなります。当初は数年のコースで開始したのですが、受講生によって事情がさまざまなので、3か月のコースとして、希望者は上級コースにステップアップしていけるようになっています。どのコースも無料で、受講後は自営を始めるか、または工場や企業に就職するそうです。技術力が高いので就職先には困らない上に普通の縫い子さんよりは賃金も高めにもらえるそうです。受講生は主に近所に住む女性たちで、虐待の被害者などが多いそうです。



奥の建物の1階には小学生くらいの子どもたちが読み書きを学習していました。ストリートで働いている子どもたちに教育と食事を提供し、公教育につないでいくそうです。奥にはキッチンがあり、お鍋から湯気が立ち上がっています。毎日来る子もいれば、たまにしか来ない子もいるそうです。FXBのもう一つのプログラム、ユース・シアターについては次回ご紹介します。

サブタスクフォース会議

前回プロジェクト推進のためのタスクフォース・ミーティングのご紹介をしましたが、9月25日から、サブタスクフォース・チームも始動しています。タスクフォースのメンバーの中の、社会福祉局訓練校(SWTS)のスタッフ(副校長と講師2名)とJICA専門家で成る少数精鋭チームで、毎週打ち

合わせを行い、研修プログラム作りや講師探しなどのTOTに向けた具体的な準備作業を担います。

中心になる訓練校副校長のKyaw Myo Thant(ジョー・ミョー・タント)さんは、雰



囲気は物静かで穏やかな、「ミャンマーの草食系男子?」。現場経験も豊富で、最近も男性被害者の支援を担当した経験から、故郷に帰らずヤンゴンで仕事を探そうとする被害者たちに、安全な移住についての短い教育プログラムができないか、身分証明書のヤンゴンでの発行(現在は故郷に帰らないと取れない)ができないかと考え、提案してくれました。現存のシステムの枠を超えた支援まで視野に入れて考えることができる人です。

訓練校講師のEi Ei PhyoさんとKhin Thuzar Ayeさんも、まだ若手ですが社会福祉や心理学についての基本的な知識があり、次々と意見を出してくれます。3人ともヤンゴン大学の1年間の社会福祉ディプロマコースで学んだそうです。このコースには大学の卒業生も入ってきますが、社会福祉局から毎年30人受講生を送り込んでいて、社会福祉局の人材養成の役目も果たしているようです。社会福祉局の職員の中でも、このように専門的知識を持った人たちと、シェルターなどの現場で異動もなく働いている人たちとのギャップも少し気になっているところです。



本通信は、プロジェクトの進捗状況および周辺情報をお知らせするために専門家の見聞をお送りしています。JICAおよびプロジェクトのカウンターパートの見解ではありません。禁転載